

## 1.はじめに

接続表現は談話の上で重要な役割を果たしている。話し手は接続表現によって、自分の意見をわかりやすく説明し、聞き手はそれによって、次の来る言葉を推測できるからである。接続表現とは「二つ(以上)の言語単位(単語・文節・句・節・文・連文・段落等)の間に位置して、それらの意味内容を関係付け、より大きい意味のまとまりとして結びつける働きをする言語形式のことである」(佐久間 1990:13)。本文はゼミの談話の展開を考察する目的なので、文の接続関係に関わるものに限る。

そこで、本文は以下の2点を明らかにすることを目的に、大学院生のゼミにおける接続表現の実態の調査・分析を行うことにしたい。

(1) 大学院のゼミにはどんな接続表現がよく出現されるのか。

(2) 大学院のゼミは先生、発表者、質問者からなっているが、それぞれ身分ごとにどんな接続表現が用いられるのか。

普通留学生は自分の国で日本語その言葉だけを勉強し、ゼミで論文を発表するチャンスがほとんどない。だから、日本の大学院に入って、ゼミでどのようにはっきりと意見を発表したり、発表者と議論したりするのか大変悩んでいる。以上の2点が明らかになれば、発表者はどの接続表現に注意を向けて、相手の重要情報をつかむのか、また、どの接続表現を使って、わかりやすく自分の意見を伝えるのかに役立てるのではないかと思う。

## 2.先行研究と本研究の位置づけ

接続表現の基本文献としては、石黒(2008)、石黒(2010)、伊能(2012)が挙げられる。

石黒(2008)はだいたい「接続詞全体の役割、四種十類の接続詞のそれぞれの意味と機能、接続詞の使用上の注意点」という三つの内容が書かれているが、接続詞を一つ一つ深く分析し、接続詞の持つ多様な側面を把握する研究として価値が高いものである。

石黒(2010)は11講義における接続表現を調べた研究である。結論として、①「接続表現の総文数に対する出現頻度は36.9%で、かなりの高率で出現している」、②「「で」「それから」「そして」といった順接型、添加型が一番多い」、③「大話段を開始・終了するのに「では」などが多く使われ、小話段の開始は「で」や「それから」「そして」で、終了は「だから」「ということで」や「つまり」などで表示されることが多い」、④講義の重要情報を表示する接続表現には、「だから」、「ということで」、「つまり」、「たとえば」、「ところが」、「では」、「ただ」の類がある」という四つのポイントを挙げている。特に興味深いのは④で、重要情報の表示に役立てる接続表現を指摘している。

伊能(2012)は講義談話において、受講ノートを取る際の手がかりとなりうる接続表現は何であるのか、そして、談話構造のどの部分に現れて、受講ノートを取る際の手がかりになるのかという二つの問題を分析した。「「じゃ、じゃあ」「つまり」「だから」「実は」の5種の接続表現が受講ノートを取る際の

手がかりとなりうる」「5種類の接続表現は話段の開始部、継続部、終了部という現れる位置によって、平均残存数が異なり、接続表現が談話の構造との関わりにおいて、受講ノートを取る際の手がかりとなりうる」ことが明らかとなった。

以上見たように、講義における接続表現の研究がいくつか見られるが、大学院のゼミの談話を対象に、接続表現の特徴を分析する研究はない。そこで、私はゼミの談話において、どんな接続表現が出現されるのか、身分ごとにどんな接続表現が用いられるのかについて分析することにしたい。

### 3. 研究の資料と分析の方法

研究の資料は2015年9月に、神奈川県三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの40分程度の談話二つを文字化したものである。その文字化データから接続表現の観点からデータを抽出し、分析を行った。

### 4. 分析の結果

#### 4.1 接続表現の出現数量と傾向

全体からみると、順接型の「で」、同列型の「例えば」、添加型の「あとは」「まず」、逆接の「でも」が一番多く使われ、ゼミの接続表現は順接基調であるといえるだろう。石黒（2010：143）は講義の接続表現が順接基調であると指摘している。その表を引用して、講義の接続表現と比べてみると、接続表現の出現傾向が変わらないという見方もできそうである。例えば、具体的な接続表現を除いて、1位から4位まで、順接型、同列型、添加型の接続表現が一番多く使われている。順接型の「で」はゼミの接続表現でも、講義の接続表現でも1位であり、逆接型の「でも」はゼミの5位で、講義の7位で、ほぼ対応している。

表1 大学院のゼミの接続表現

	接続表現	数量	類型
1	で	14	順接型
2	例えば	12	同列型
3	あとは	10	添加型
4	まず	8	添加型
5	でも	7	逆接型
6	ていうのは	3	補足型
7	ですから	2	順接型
8	そして	2	添加型
9	つまり	1	同列型

表2 講義の接続表現

	接続表現	数量	類型
1	で	1108	順接型
2	それから	251	添加型
3	そ(う)して	146	添加型
4	つまり	99	同列型
5	だから	80	順接型
6	んで	53	順接型
7	でも	51	逆接型
8	ところが	49	逆接型
9	ですから	48	順接型

#### 4.2 身分ごとに使われる接続表現の特徴

大学院のゼミには普通発表者、質問者、先生からなっている。発表者は自分の論文を発表して、質問者はそれについて、コメントして、先生はまとめる。身分ごとに果たした役割が違うから、接続表現の使用も違っている。

表3 先生の使った接続表現

	接続表現	数量	類型
1	で	6	順接型

2	例えば	1	同列型
2	でも	1	逆接型
2	ですから	1	順接型
2	ということで	1	順接型
2	そうすると	1	順接型

表4 発表者の使った接続表現

	接続表現	数量	類型
1	あとは	9	添加型
2	まず	4	添加型
2	でも	4	逆接型
4	で	2	順接型
4	そして	2	添加型
6	例えば	1	同列型
6	ていうのは	1	補足型
6	それで	1	順接型
6	つまり	1	同列型
6	つぎに	1	添加型

表5 質問者の使った接続表現

	接続表現	数量	類型
1	例えば	10	同列型
2	まず	4	添加型
3	で	6	順接型
4	でも	2	逆接型
4	ていうのは	2	補足型
6	ですから	1	順接型
6	なので	1	順接型
6	ちなみに	1	添加型
6	あとは	1	添加型

先生は独話みたいで、一人で長く話し続けられるから、話の本線の継続を示す「で」が一番多く使われる。また、今までの発表をまとめる役割を果たすから、「ですから」「ということで」という結論を表す接続表現も多く使われる。「でも」は一回だけ使われるが、後ろには解決案が出てくるので、重要情報を示している。

(1) そこに、教師とか、それから絵本の難易度とか、調査とかなんかが入ってくると、それがなんで今までの柱に、インタビューですけど、それに、どういうふうに、難易度だとか、あの、教師のとかが関わってくるのかがよくわかんない。でも、絵本多読が日本語学習者に、えー、その、効果的だと、学習者とその絵本多読に関わった教師が考えているんだってところまで論文の枠を広げて、教師に対するインタビュー、絵本多読を実施していた教師もそう考えているっていうので、いろんなところで日本語学習に効果的だと、それに携わった人、学習者も教師も考えているっていう結論に導こうとしたら、(略)

発表者は質問者の質問に答える時、「まず」「つぎに」「あとは」を使って、いくつかの理由を説明する。だから、序列を表す接続表現が一番多く使われている。「でも」は逆接を表す接続表現だが、発表者の使った「でも」は相手の意見を反対するのではなく、自分の迷っている所を指摘するという特徴がある。つまり、質問者の指摘した問題を認めただけで、解決案が分からなくて、迷っているときに使う。

(2) 外国語学習、言語かかわらず、その、児童のものとか幼児向けのものとか効果があるっていうことは言いたいんです。でも、二つ目の実験でやっていることは、日本語の絵本をどうやって選んでいるかっていうことなので、ちょっとそこは迷っているところです。

質問者は発表者の論文の問題点を指摘する役割を果たすから、具体的な問題点は「例えば」で示す。

(3) 質問者：4 頁のライティング不安尺度のところなんですけれども、ちょっとかぶってるところがあるんじゃないかっていうふうに。

発表者：かぶっているところ↑

質問者：っていうのは、例えば、7 番「学術的な言葉を使いたいが分からなくて不安だ」と 12 番「レポートでよく用いられている表現が分からなくて不安だ」っていうのは、似たような感じのものを指しているんじゃないかなと

また、コメントするとき、発表者が常に相槌するから、また、さっきの話を続ける場合、「で」がよく使われている。

(4) 質問者：私は因子分析があんまりわからないんですが、この第二因子のところでは、あの、テーマやタイトルを決められないということについてですね。

発表者：はい。

質問者：で、あの、テーマが決められないのには（略）

問題点が一つではないとき、「まず」「ちなみに」「あと」の序列を表す接続表現もよく使われている。

このように、先生が問題点を指摘した後の「でも」、質問者が具体的な例を挙げる「例えば」は重要な情報を示す。発表者でも質問者でもいくつかの問題をわかりよく言うとき、序列を表す「まず」「あとは」を使う。

したがって、ゼミの接続表現の特徴としては、順接基調で、身分によって使われる接続表現が違うという 2 点が挙げられる。

#### 参考文献

石黒圭（2008）『文章は接続詞で決まる』光文社新書

石黒圭（2010）「第 7 章講義の談話の接続表現」佐久間まゆみ編（2010）『講義の話段の表現と理解』くろしお出版, PP.138-152

伊能裕晃(2012)「講義理解の手がかりとしての接続表現—受講ノートの分析による—」『早稲田日本語研究』21、早稲田大学日本語学会, PP.1-12

佐久間まゆみ（1990）「1 接続表現（1）」寺村秀夫ほか編『ケーススタディ 日本語の文章・談話』おうふう, PP.13-23